夢中になれば自ら伸びる 目的意識を持ってひたむきに「意欲」を引き出す教育を

おおらかな校風を誇る多摩大学目黒中学校・高等学校。近年は大学合格実績を着実に伸ばしているが、その背景にはアクティブ・ラーニング中心の質の高い授業、校外での体験型プログラム、実践的な国際教育などがある。「生徒が伸びるきっかけを提供するのが学校の役割」と語る田村嘉浩校長に、同校の教育の特色を聞いた。

多摩大学目黒中学校・高等学校
田村 嘉浩 校長（田村学園理事長）

きめ細かなICT活用 教室の外にも学びの場

生徒全員にタブレット端末を持たせ、教室にはプロジェクターを設置するなど、早くから教育の情報通信技術（ICT）化を進めていた同校。日々の授業はもちろん、調べ学習や家庭学習、生徒・教員間の連絡手段として活用してきたICTは、新型コロナウイルス感染症による休校中も大いに役立ったと田村校長は振り返る。

「オンライン授業にスムーズに移行することができたのは、生徒も教員も使い慣れていたからこそ。生活習慣が乱れないよう、学校にいるときと同じように時間割を組んで授業をしたことで、カリキュラムの遅れも出ませんでした」

入学式前に休校となったため、新中1生には教科書やタブレット端末を配送。保護者の協力もあり、在校生から1週間遅れでオンライン授業をスタートできた。

「オンラインでライブ授業を配信すると同時に、別の教員が生徒の様子を確認して、集中できていない生徒には電話でフォローするなど、きめ細かい対応をしました」

ネイティブ教員による英会話授業もオンラインで実施

普段から生徒と教員の距離が近く、一人ひとりを丁寧にサポートする姿勢は、授業がオンラインに切り替わっても変わらなかった。教員に話しかけやすい、質問しやすい雰囲気は既に校風になっていると言い、これまでも中学生には細かくコミュニケーションを取りながら教育することを大事にしてきた。特に中1、2年の間はしっかりとサポート。頃合いを見計らって、だんだんと手を離していくことで自立につなげているという。

ICTと並行して、授業の中心に据えたアクティブ・ラーニングも進化を続けている。大切にしているのは、主体的に考える習慣を確立するための授業だ。

「基本的な知識・技能はもちろん、今後は自分で考えたり、自分の考えを人に伝えたり、みんなで何かを仕上げていくといった力が必要になってきます。そのため本校では、教室での授業だけでなく、学校の外にもアクティブ・ラーニングの場を広げています」

大きな柱になっているのが多摩大学との連携だ。大学のゼミに参加し、大学生と一緒にフィールドワークを行うといった活動を盛んに行っている。産業界出身の教授が多く、実業界とのつながりも強い多摩大学は、さまざまなプロジェクトを実践的に展開している。そこへ中高生のうちから飛び込んでいくことで、学校ではできない経験を重ね、学びを深めていく。毎年12月にはゼミごとの発表会が開催されるが、そこでも同校の生徒は堂々と成果発表を行っているという。

多摩大学で行われたアクティブラーニング祭（AL祭）
大学生に混じり10チームが参加

（右）ネイティブ教員による少人数授業
（左）オーストラリア研修の様子

「校外での活動は生徒を大きく成長させてくれる。そういう場面をできるだけたくさん用意していきたい」

体験重視の国際教育 海外プログラムも充実

生きた学びを通じて生徒の成長につなげる方針は、同校独自の国際教育にも通じる。専任のネイティブ教員は授業だけでなく、朝礼や部活動、学校行事でも生徒と関わる。間違ってもいい、どんどん話そうと呼び掛けるネイティブ教員の働き掛けと、さまざまな場面で気軽に英語でコミュニケーションを取れる環境が、外国人と話すことへのハードルを下げてきた。中3時にはその集大成として、2週間のオーストラリア修学旅行を実施。1家庭に1人ずつホームステイし、語学研修に取り組む。

「オーストラリア研修では、英語力を高めること以上に、世界には日本とは違う文化や習慣、考え方があることを知り、理解することを重視しています。それにはとにかく行ってみて体験するのが一番です」

オーストラリア修学旅行のほか、2カ月から1年までさまざまな留学プログラムも用意している。なるべく多くの生徒に経験してもらえるよう、提携先も増やしているところだ。今年度はコロナ禍により修学旅行をはじめ大半の留学プログラムが中断を余儀なくされたが、できるだけ早く再開したいと田村校長は語る。

文武両道をモットーにクラブ活動にも力を入れている。サッカー部やダンス部など、全国レベルで活躍する部も少なくない。中学生と高校生が一緒に活動する部も多く、先輩から後輩へ校風が受け継がれる場にもなっている。

「生徒の成長に一番必要なのは目的意識。意識的・積極的に学校生活に取り組むことが何より大切です。部活動は自分で選んで活動する分、目的意識を持ちやすい。それぞれの生徒が目的を持って自らを鍛えていく場になっています」

教育環境の充実ぶりにも定評がある。目黒キャンパスとは別に立地するあざみ野セミナーハウスは、豊かな自然に恵まれた第2のキャンパスとして機能。中学の間は週に1日ここで授業を受け、心身ともにリフレッシュしながら学習し、広々とした人工芝グラウンドで体育の授業に取り組む。また、目黒キャンパスから徒歩7分の距離に第2体育館も完成。文武両道を体現する場になっている。

右肩上がりの大学合格実績 「進化し続ける学校」を体現

アクティブ・ラーニング、校外プログラム、国際教育、さらには部活動に至るまで、多彩なメニューのなかから夢中になれるものを見つける生徒たち。彼らは高校卒業後の進路を果敢に切り開いている。2020年度も国公立大をはじめ、難関私立大に多数の合格実績を積み重ねている。

「授業の充実はもちろん、生徒が意欲・やる気を持てるように、学校全体の仕組みを考えてきた結果です。生徒がこの大学に行きたい、こういう勉強をしたい、こういう職業に就きたいとひたむきに努力することで、いつの間にか目標に届いているということだと思います」

実際、部活動に一生懸命打ち込んできた生徒ほど成績が伸びていくとのこと。何事にも自分の限界まで取り組もうという気持ちが決め手になると田村校長は指摘する。生徒のがんばりをサポートするため、自習室は夜9時まで開放。基本は自習だが、教員や大学生のチューターが質問に対応するなど、最後まで〝伴走〟を続ける。

「一人ひとりの能力に大きな差はありません。あるとすれば、やる気の差。そこを目いっぱい引き出し、どんな生徒でもつかめる多くのきっかけを用意するのが学校の務めです。『常に進化し続ける学校』として、目標を持って努力し、たくましく生き抜く力を持つ生徒を育てたいと考えています」

そう力を込める田村校長は今年の受験生へのメッセージを送った。

「受験勉強は大変だと思いますが、自分を成長させていくことが楽しいという気持ちをぜひ持ってほしいですね。中学では新しいステップがどんどん開けていきます。私たちは皆さん一人ひとりの関心や興味に応えられる準備を整えて待っています。楽しい中高時代を送れるようにがんばってください」

人工芝のグラウンド・体育館を備えた、
あざみ野セミナーハウス

全国大会常連のダンス部

本記事は、「日経マガジン教育特集号」2021年1月22日発行号より抜粋したものです。